満鉄開拓科学研究所設立の経緯と調査研究活動

大出 尚子

目次

- はじめに
- 1. 労働科学研究所と暉峻義等
- 2. 満鉄開拓科学研究所設立の経緯
- 3. 暉峻義等の構想
- 4. 調査対象と拠点
- 5. 研究活動——『開拓科学生活図説』から——
- 6. 研究成果
- おわりに

はじめに

1939年4月、「満洲国」に設立された満鉄開拓科学研究所とは、財団法人日本労働科学研究所の分室研究所であり、かつ満鉄の鉄道総局人事保健課の所管という、2つの組織に属した研究所である。

満鉄開拓科学研究所の母体である労働科学研究所や、満鉄開拓科学研究所の所長であった暉峻義等（1889～1966）の学問的あるいは伝記的研究などの先行研究は数多く存在するものの、これらの研究の中では「満洲国」に設立された満鉄開拓科学研究所や、渡満して満鉄開拓科学研究所で行った暉峻義等の調査研究活動に注目したものはない。

例えば、裴富吉氏は、労働科学の創始者・暉峻義等の戦争責任を厳しく指弾し、戦時下における暉峻の労働科学について「戦争のための労働科学」であったと位置づけ⁽¹⁾、暉峻の戦時中の著作を列挙しながら、「戦時期、暉峻の『社会衛生学』は『民族衛生学』という危険な地域にすみいていた。この『民族衛生学』は……他民族排他[抹殺]論を正当視する狭隘な観念と同居していた」⁽²⁾とし、その論調は終始暉峻の、戦争への学問的加担を非難するものである。さらに同

(1) 裴富吉『労働科学の歴史——暉峻義等の学問と思想——』白桃書房、1997、219頁。

(2) 裴富吉『労働科学の歴史』223頁。

書で、戦争中の暉峻をはじめとする労働科学者の研究内容を「主観的と客観的とを問わず、また意図的と結果的とを問わず、国家主義・全体主義に迎合してしまった」⁽³⁾としている。

ただし、「彼ら（労働科学研究者——筆者注）の生涯における活動成果の全体をとおして、包括的に評価されるべきものである。そこから戦時期だけをはじめ、みてくれというのは、調子がよすぎていて、完全な逃げ口上である」と指弾しているにもかかわらず、紛れもなく暉峻の「生涯における活動成果」の一部である満鉄開拓科学研究所における研究活動には、全く触れていない⁽⁴⁾。そのほか、労働科学研究所編『労働科学研究所 60 年史話 創立 60 周年記念』労働科学研究所、1981 においても、労働科学研究所の分室である満鉄開拓科学研究所の活動に関しては、ごく簡単に触れられているだけである。

このように、「満洲国」の満鉄開拓科学研究所とその活動については、これまで注目されてこなかった。

戦時下、日本の文部省は、占領地内の民族実地調査遂行機関として民族研究所を設立した。その設立経緯と活動内容を明らかにする試みは、中生勝美氏によってなされている⁽⁵⁾。同様に、満鉄開拓科学研究所も民族の実地調査を遂行した機関であり、日・満（ここでは漢族を指す）・露・鮮のいわゆる「民族協和」を担う各民族の居住する村落の生活実態調査を行っていた。その研究調査結果は『開拓科学生活図説』と題する 3 冊の報告書、すなわち暉峻義等述『開拓科学生活図説 第一冊 白系露人の営農と生活』大阪屋号書店、1942・暉峻義等述『開拓科学生活図説 第二冊 満人の営農と生活』大阪屋号書店、1943・暉峻義等述『開拓科学生活図説 第三冊 日満露三民族の生活比較』大阪屋号書店、1943 に集約されている。

本稿では、上記『開拓科学生活図説』3 冊に記された同研究所の概要と研究成果から、その活動を概観する。そして「満洲国」内で日本人が行った学術活動のひとつとして、満鉄開拓科学研究所が行った東北地方に居住する民族の生活実態調査に着目し、所長暉峻をはじめとする所員が、「民族協和」の旗下にあつて、どのような活動を展開していたのかを、調査研究内容から検討していく。そこには、これまでの暉峻の人物研究や、「満洲国」の政策研究を補填する意図もある。

1. 労働科学研究所と暉峻義等

1939 年 4 月、「満洲国」の牡丹江省横道河子に満鉄開拓科学研究所が設立された。その所長を

(3) 斐富吉『労働科学の歴史』128 頁。

(4) このほかに暉峻義等の伝記的研究として、三浦豊彦『暉峻義等——労働科学を創った男——』《シリーズ民間日本学者 31》リプロポート、1991 があるが、ここでの満鉄開拓科学研究所所長・暉峻についての記述は、鈴木慎次郎「開拓科学研究所」『暉峻義等博士と労働科学』暉峻義等博士追憶出版刊行会編集発行、1967、154～159 頁を抄録するにとどまっている。

(5) 中生勝美「民族研究所の組織と活動——戦争中の日本民族学——」『民族学研究』62-1、1997。

勤めた人物が暉峻義等である。

暉峻は、日本経済史における経営労務論の源流となった労働科学の創設者である。1917年12月に東京帝国大学医科大学を卒業し、同大学の生理学教室に入った。生理学教授永井潜のもとで学ぶことになっていたが、永井の推薦によって1919年創立の大原社会問題研究所に社会医学研究部門の研究者として入所した。1921年、大原社会問題研究所から社会衛生部を分離して設立した倉敷労働科学研究所の所長に就任した。倉敷労働科学研究所で暉峻は、倉敷紡績の工場疲労問題を研究課題の出発点とし、労働力の保持による生産力の確保増強に関する研究を行った⁽⁶⁾。さらに紡績研究から、伝統的土木工事、農家婦人作業服、農薬中毒予防、労働のエネルギー消費と栄養の研究、国民栄養と、調査研究の対象を広げていった⁽⁷⁾。

1936年、倉敷労働科学研究所は日本学術振興会の協力により施設を東京に移転し、財団法人日本労働科学研究所を設立した。移転後も暉峻は、引き続き所長に留任した。労働科学研究所が財団法人化したことに対して、元日本学術振興会学術部主事で労働科学研究所主事であった潮見実氏は、「金さえあれば自由な研究活動のためには財団法人がよいのではあるが、……政府の補助や会社からの援助などで辛くも経常費を賄っていた労研は、産報運動は窓口一本という国策の統制方針のもとに屈しつつに昭和17年1月産報傘下の一研究所とな」ったとしている。つづけて「戦局のきびしさはとうとう先生を大翼賛会国民運動局長就任……という事態にまで追いこんでしまった……要するに研究所としては国策に添うという至上命令の圧力下に苦悶する受難の時代でもあったのである⁽⁸⁾」と、労働科学研究所が、時局の影響を色濃く受けた活動を行っていたことを語っている。

戦時中、労働科学研究所は大日本産業報国会（産報）に統合されていた。ただ、医学・生理学・心理学・社会学等多領域を専門とする研究者を抱えていたため、時局の影響を蒙らずに独立して活動することが許されなかった時代であった。このようななか、満鉄開拓科学研究所は、1939年に労働科学研究所の事実上の分室として設立されたのである。

2. 満鉄開拓科学研究所設立の経緯

1939年1月、「満洲国」政府主催で、開拓事業⁽⁹⁾に関する懇談会が「満洲国」の首都・新京で

(6) 倉敷紡績『回顧六十五年』倉敷紡績株式会社、1953、229頁参照。

(7) 大津寄勝典『大原孫三郎の経営展開と社会貢献』日本図書センター、2004、330頁参照。

(8) 暉峻義等博士追悼出版刊行会編集発行『暉峻義等博士と労働科学』148頁。

(9) この懇談会では「移民」という言葉を使用しているが、1939年当時の「満洲国」では、これまで使われてきた「移民」という語を用いず「開拓民」あるいは「拓土」に統一しようとしていた。本稿では、「開拓」の意味するものが植民地支配を正当化するものであるという背景に留意しながらも、当時の呼称にならない、「開拓」「開拓民」「開拓政策」等を使用する。

行われ、暉峻も出席している⁽¹⁰⁾。「日鮮満合同移民懇談会」ないし「日満移民会議」と称されるこの懇談会は、1月7日と8日の2日間にわたり、日本の軍、および開拓政策関係者・「満洲国」政府代表・朝鮮総督府代表を集めて開かれた。『満洲日日新聞』の記事によると、「移民根本国策大綱」が協議されたこの会議では「1.移民区分・入植要領・鮮人問題、2.移住地行政・経済機構、3.移民用土地に関する問題、4.農業経営及び生活様式、5.青年義勇隊、6.移民と協和会との関係事項、7.移民事業処理機関、8.財政・経済機関、9.其の他」の項目における今後の具体的方策について話し合われた⁽¹¹⁾。また暉峻によると、会議上では開拓事業への科学性の附与、特に生活方面に科学的指導力を強化することが焦眉の課題であるという見解が示されたという⁽¹²⁾。開拓関係事業を政府事業として推進していくには、予算・制度・組織等の整備に時間がかかるため、まずは民間事業として展開すべきであるということが、関東軍の開拓主務者や官民有志の一致した見解であった。そこで暉峻は、関東軍と開拓総局⁽¹³⁾から薦められ、満鉄総裁からは満洲開拓のために、生活に関する研究に着手するように委嘱を受けた⁽¹⁴⁾。このようにして、1939年、政府の事業に対して先駆的役割を持つ研究機関の設営が開始されたのであった。

設立の具体的話し合いは、関東軍三品参謀、坪内貞二満洲拓殖公社総裁、伊澤道雄満鉄理事、稻垣征夫拓殖委員会事務局長、結城清太郎開拓総務局長等によって進められた。以後、伊澤道雄満鉄理事は、研究に要する一切の費用は満鉄が負担することを表明し、同年2月には、満鉄の当局者と暉峻の間で研究所設立の打ち合わせが行われた。

このような経緯から、出資者である満鉄から鉄道自警村・訓練所及び開拓民の農業労働ならびに生活方法に関する調査研究を請け負う形で、開拓民の生活方法を確立するための調査研究、先住民族の生活形態および労働形態と、開拓民の生活形態・労働形態の比較研究を事業の目的として、4月1日に満鉄開拓科学研究所が設立された。

以上の経緯を見れば明らかかなように、満鉄開拓科学研究所は、満洲開拓政策という国策推進のための研究機関という性格を持っていたのである。

1939年9月から活動を始めた研究所は、牡丹江省横道河子にあった満鉄附属病院の一棟をその活動拠点として3年間、調査研究活動を行った。

研究員は、東京の労働科学研究所の職員から選抜した。研究員として7名、事務担当員1名と助手6名の計14名が着任した⁽¹⁵⁾。

(10) 暉峻義等「満鉄開拓科学研究所概要」『労働科学』19-1、日本労働科学研究所、1942、55頁参照。

(11) 『満洲日日新聞』1939年1月8日参照。

(12) 暉峻義等「満鉄開拓科学研究所概要」55頁参照。

(13) 「満洲国」内の「未開発地域」における「未利用地」の開発と移民事業との一元化総合運営を図るために、1939年1月1日に設立された。満洲移民政策に関する「満洲国」政府の主務官庁であり、産業部の外局。

(14) 『日満露三民族の生活比較』73頁参照。

(15) 暉峻義等「満鉄開拓科学研究所概要」57頁参照。

生活の生理学	所長 暉峻義等 (医学博士)
環境の生理学	室川正彦 (医学博士)・鈴木慎次郎 (医学士)
食糧及び栄養学	山添三郎 (医学博士)
農業及び農業経営学	内海義夫・西外居 (農学士)
住居に関する研究	黒川一夫
事務主任	小河等隆
助手	内海富貴子・清水務・澤田正之・井澤雪・花屋調吉・千長彩

以上のように、医学・農学・建築学を専門とする職員を招聘したことから、発足当初から既に、中国東北地方に居住する人々とその生活に関する研究を有機的に結合させ、直接に日本人移民の生活設計に役立てようと考えていたことが伺えよう。

3. 暉峻義等の構想

中国東北地方に渡った日本人研究者の多くは、日本人開拓村を調査対象とし、日本人の生活実態調査を行っていた。一方の暉峻の考えは、組織運営の方針も制度も定まっていない状況にある以上、開拓村を調査研究の対象とする時機ではない、というものだった。暉峻は、日本の他の研究者とは異なり、まず北満地方に先住する白系ロシア人・漢族・朝鮮族を調査研究対象に選んだ。

なぜ暉峻は、調査対象として露・漢・鮮の各族を日本人より先行させたのか。その真意を『開拓科学生活図説』の第1冊『白系露人の営農と生活』の「序」で、以下のように述べている。

私の意図は先づ白系露人の生活と農業、満洲原住民族の生活と農業を究明することといふ二つの目標に向つて、同時に研究の焦点を集中して行つたのである。即ち既に満洲の風土によく適応してその生活を整へその農業を営んでゐるこれ等二つの民族の生活を浮彫りにするために研究の歩を進めたのである。しかる後進んで半島開拓民に及び、そして最後に日本開拓農村の生活の建設のための手伝ひをすることが順序だと考へたのである。即ち先づ人材を作り、育て、然る後開拓農村生活建設のために働かうといふのである。

暉峻義等の抱いた研究方針は、露・漢・鮮各族を開拓の先駆者として位置づけたうえで、彼らが如何にして北満の風土に順応していったのかを究明し、それを日本人開拓民の入植と生活設営に反映させようというものだったのである。

より暉峻の構想がわかる言葉として、『開拓科学』第1号の巻頭に著した「開拓科学の概念」を以下に引用しておく。鈴木慎次郎は、暉峻の「当時の社会趨勢とその渦中における先生の考えをよく物語つ」た言葉であると指摘している⁽¹⁶⁾。

(16) 鈴木慎次郎「開拓科学研究所」156～157頁。この「開拓科学の概念」については、暉峻義等「満鉄開拓科学研究所概要」56～57頁および『日満露三民族の生活比較』74～75頁に同文が掲載されている。

一. 開拓科学は国家建設の核心であり、またその推進力としての、五族民衆の「生」の培育と啓発とに任じ、以て満洲国の建国の理念を民衆の生活に浸透し、体现せしめ、且つこれを宣揚することを使命とするものである。

二. 従つてこの学に於て把握せらるべきものは、五族民衆の生活の実相である。科学的手段と方法とをつくして、この国土、この民生を、その本然の性に於て、明察し、了得するにある。併しながら吾人はただ生の現実を了得するを以て足れりとするのではない。蓋し、この学に於て、最も重んぜらるべきものは実践である。即ち、知に即して行じ、行に即して知る。これこの学の建設発展の過程である。

三. この学の窮極の目的は、民衆の生活力を、その本来個有の機と能^{ツツ}とに於て強化し、これを国家的理念の下に、新しく陶冶結成することによつて、五族の協和繁榮と、国力の増進とを、所期するにある。従つてこの学の発展は五族の生活に向上発展の指針を附与し、国家生産力を民衆の生活力の、たゆまざる質的向上に於て確保するものであつて、これこそ満洲国の建設とその興隆とに関する最も基本的な問題である。

四. 科学の発展の歴史に徴するに、学問の進歩は、学の理論や、科学的方法の発展に基くよりも、むしろより根本的には、科学者の態度、研究者自身の信念の如何にかかっているのである。ここに開拓科学自体の問題があると同時に、国家における科学政策と學術振興の根本問題が横たわっている。

五. 以上は開拓科学研究所の創設に際して、開拓科学に關しての、余の平素の所懐の一端を述べ、同学同志の批判考察に供したのである。

以上の著述では、自らの学問である「開拓科学」が、「満洲国」の「五族の生活に向上発展の指針を附与」することになると強調しており、「満洲国」の建国理念である「五族協和」を実現するために行うのであるという使命感が伺える。

4. 調査対象と拠点

上述した3冊の図説は、暉峻が所長を務める東京の労働科学研究所が出版したものである。全5部からなる《労働科学研究所報告》のうち、「第四部 勤労文化」に収められているこの図説について、暉峻は次のように述べている。

三ヵ年の研究の間に得られた業績の中で、一般に興味があると思われる事項を茲に摘出して、報告論文の出版に先立って、多数の写真や図録を加えて編述したものがこの図録であるが、これらの資料は、且て吾等の研究の一段落を機会に、昭和16年7月に新京と奉天で、同11月には東京に於て、専門家や一般公衆の展覧に供した時の資料の大部分をなすものである。即ち私はこの展覧会の資料を再検討し、これを更に系統的に整理し、かつこれらに

適切なる説明を附し、なお必要な場合には私見をも多く附加して、本書の編述をなしたのである。開拓関係者、満洲在満者は勿論、広く生活と勤勞とについて関心を有する人々の参考に資するためにこの図説が編述せられたのである。

この図説は、第1冊は白系露人の営農と生活、第2冊は北安村民の生活と営農（正しい題名は「満人の営農と生活」——筆者注）、第3冊は日満露三民族の比較なる3冊に区分して順次出版せられるものであって、勿論これは満鉄開拓科学研究所の報告の第1冊乃至第3冊を形成するものである。併しこの研究は私の指導の下に労働科学研究所の事業の一部として行われたものであるという理由によって、「労働科学研究所報告」の「第一部勤勞文化」の部類に属する出版物として取り扱われるのである⁽¹⁷⁾。

すなわち、満鉄開拓科学研究所が事実上、労働科学研究所満洲分室であるため、労働科学研究所の研究業績の一部として出版されたのである。

上述したように、満鉄開拓科学研究所は北満地方に居住する民族であるロシア人・漢族・朝鮮族を調査対象とした。

初めに着手した調査は、ロシア人の生活に関する実態調査である。調査地は牡丹江省横道河子である。横道河子には、ロシア人が集団で移住して形成した開拓村「ロマノフカ村」があった。ロマノフカ村とは、沿海州に住んでいた正教徒であるロシア人が、ソヴィエト政府からの迫害を受けたために1931年から1935年にかけて移住してきて形成した村である。ロマノフカ村は、「満洲国」建国後の1936年に、ギリシア正教会非改革派のロシア人2名が沿海州から「満洲国」東安省に越境し、定住を希望したことに始まり、集落建設が行われた。1939年には26戸・139名が横道河子に集住して、半農半獵の生活を送っていた⁽¹⁸⁾。

《ロマノフカ村入植過程表》

年度	1936	1937	1938	1939
新入植世帯数	2	18	1	3
年度末総世帯数	2	20	22	26
新入植人口	4	99	6	14
年度末総人口	4	109	111	139

※内海義夫「ロマノフカ部落の建設過程」『開拓科学』6, 1940, 7頁参照⁽¹⁹⁾

上表から、1936年から1937年にかけて一挙に入植し、定着したことが分かる。日本人の開拓政策関係者は、ロマノフカ村の人々が半農半獵の生活に加えて牧畜を行って自給自足の生計を立てていた点と、生活様式は改変せず、「満洲国」内に移住して間もないうちに土地に適応して安定

(17) 暉峻義等『白系露人の営農と生活』序。

(18) 山添三郎『ロマノフカ村の話』満洲事情案内所, 1941, 2～15頁参照。

(19) なお同表は、藤山一雄『ロマノフカ村』満洲移住協会, 1942, 19頁にも掲載されている。

した生活を送っている点に関心を持った。それは、1932年以後順次建設された開拓村の日本人が、生活設計に苦心を強いられる状況にあったからである。日本人の目に映った彼らロシア人の入植方法及び生活設計は、手本とすべき点を多くもつものであり、満鉄開拓科学研究所がその調査研究の役割を担ったのである。

次に着手したのは、漢族の生活実態調査である。この調査は、漢族を指して「北満洲に移住してから、既に約千年の歴史をもち、常に北進し続けて今日に到っている、満洲原住民」⁽²⁰⁾と論じているように、漢族が東北地方へと移住してきて「満洲国」内で圧倒的多数の人口を占めるに至った過程とその生活実態を解明することが目的であった。

漢族の調査地は、牡丹江省寧安県北安村である。北安村は、「開拓以後300年の歴史を有し、比較的安定した而も北満農村の諸性質を具備している農村」⁽²¹⁾であること、また、暉峻が北満を旅行した際に車窓から東京城を中心とする農業地帯を眺め、北安村の豊かな農村風景が深く印象づけられていたことから、調査地として選定されたのであった。

朝鮮族に関しては、3冊の図説は日・漢・露各族の調査報告書であるため、詳しい調査内容等は記載されていない。しかし、以下の「濱江線をハルビンから牡丹江に向うて旅すると、横道河子駅から30分にして道林駅につく。こゝには半島人の開拓部落がある。この村にも吾々は屢々調査の歩を進めた」⁽²²⁾という記述と、次節に述べる満鉄開拓科学研究所の調査研究の経過からは、満鉄開拓科学研究所の事務所の所在地やロマノフカ村からさほど遠くない道林を調査地に選定して朝鮮族の調査が実施されたことがわかる。

5. 研究活動——『開拓科学生活図説』から——

では、満鉄開拓科学研究所はどのような研究活動を行っていたのであろうか。3冊の図説から具体的な調査内容を考察する。

まずは、研究の経過を時系列に沿って概観する。1939年から1941年の3年間にわたる満鉄開拓科学研究所の主要な活動は、以下のとおりである⁽²³⁾。

- 1939年1月 移民事業に関する政府懇談会
- 2月 暉峻義等が満鉄の当局者と研究所設立について打ち合わせ
- 4月 研究所設立、実際の活動に着手

(20) 暉峻義等『満人の営農と生活』2頁。

(21) 暉峻義等『満人の営農と生活』5頁。

(22) 暉峻義等『白系露人の営農と生活』2頁。

(23) 暉峻義等『日満露三民族の生活比較』75～77頁参照。

- 5月 横道河子の満鉄病院の一棟に本拠地を定める
所員黒川一夫が先発して奉天と新京を往来し、準備に取りかかる
- 9月 全所員が横道河子に着任
牡丹江寧安県北安村の生活及び栄養調査に着手。1ヶ月の滞在
- 1940年1月 ロマノフカ村のロシア人集落調査を開始
- 2月 樺林開拓団の調査
- 4月 北安村の営農・栄養・住居調査
北安村に研究所分室を設置
- 7月 北安村及びロマノフカ村で栄養・営農調査
道林朝鮮族農村調査
道林開拓団及び海林朝鮮族を巡視
- 9月 道林朝鮮族農民の入植過程・栄養調査
北安村漢族農民の基礎新陳代謝その他の研究調査
- 10月 北安村及びロマノフカ村で営農・栄養調査・労働強度測定
- 11月 横道河子附近のロシア人家屋調査
- 1941年1月 北安村旧正月の食事調査
- 3月 東満開拓地視察
- 4月 青年義勇隊及び開拓村、漢族のビタミンC試験
北安村農業労働強度測定
- 5月 三河ロシア系農村調査
- 6月 ロシア系青年の基礎新陳代謝実験及び栄養調査
- 7月 ロマノフカ村調査
- 8月 北安村分室閉鎖
日本内地帰還のため準備
満鉄開拓科学研究所事務所を東京の労働科学研究所所内に移す
- 9月 「開拓科学展覧会」準備
- 10月 所員一同渡満 新京（16～18日）、奉天（22～23日）にて展覧会及び「開拓科学の夕」開催
- 11月 東京の満鉄本社にて展覧会開催（25～12月5日）

満鉄開拓科学研究所は、大きく「風土に関する研究」「生活活動に関する生理学的衛生学的研究」「農業労働科学の研究」の3項目の研究に取り組み、各研究には医学・農学・農業経済学および建築学を専門とする研究者が担当した。具体的には、各村落の建設過程にはじまり、生活・営農に関する調査や、そこに暮らす漢族やロシア人の発育・体力測定、および寒冷暴露時の生理的変化・耐寒食・耐寒衣服等に関する実験的研究を行った。

以上のような項目に基づく研究は、その成果を「満洲国」内に渡った開拓民の生活に反映させるために行われたものである。そのため、先住民の日常生活に入りこんで、より近い場所から彼らの生活を観察し、測量・統計等も行ったうえで明らかにした各農村の実態を、開拓民に理解させようとした。特に3冊目の図説では、開拓民が理解しやすいように、日・漢・露各民族の生活様式を比較し、それぞれの特徴と優れた点を紹介している。

3民族の生活様式を比較している例として、以下では特に住居に関する研究に着目する。

ロマノフカ村では、住宅の建築・床下の構造・家の間取りという住宅自体の構造から、建築に用いられる大工道具の種類と用途を調査しており、家具類所有状況についてはロマノフカ村全世帯の統計を取るという手法をとっている⁽²⁴⁾。家具の調査では、ロシア人が押入れ・物置・棚というものをほとんど持たないことに注目して、開拓民の家庭にみられる家具・装飾との違いを明らかにしている⁽²⁵⁾。そして収納にスペースを取らないロシア人および漢族の住居は、耐寒のために住居面積を小さくする設計になっていること、また、収納せずとも家具類自体が装飾の役割を果たしていることを、日本人に比べて「完成された形が出来上がっている」と考察している。また、特に先住民族固有の採暖方法に関しては、詳細な研究を行っている。ロシア人家庭で用いられるペチカによる採暖に関しては、冬季室内温度の計測・床下温度の計測を行ったり、ペチカの高さによる室内温度の変化・ペチカ表面温度と室内温度及び外気温度3者の関係を明らかにしている⁽²⁶⁾。漢族家庭で用いられるオンドルによる採暖に関しても、冬季室内温度の計測・床の表面温度の計測に加え、炕面温度の時間的変化を計測している。ロシア人及び漢族が寒冷的な気候でもこれらの伝統的な採暖方法によって快適な生活を送っていることに注目し、開拓民の家庭にも効果的に用いられるべきであるという結論に至っている。この種の主張は、「満洲国」建国当初から、日本人開拓村が建設されるにあたって言われ続けてきたのだが、実際にペチカやオンドルを使っても、家屋構造との関係性を考慮していなかったり、畳を用いた日本式建築によって暖房効率が上がらないなど、開拓民は寒冷的な気候の中での生活に苦心していた。満鉄開拓科学研究所も、室外温度が零下2度から零下14度という寒い日に日本人開拓村の農家の室内温度を測定したところ、ペチカとオンドルを用いているにもかかわらず、室内温度摂氏0度から最高でも12度を指していたとして、適正温度よりも著しく低いことを問題視した⁽²⁷⁾。

満鉄開拓科学研究所が行った調査は、日本人開拓村の惨状を打開して新たな生活方法を提示するという意味で、「満洲国」開拓事業関係者からも期待されていたのではないかと考えられる。

(24) 暉峻義等『白系露人の営農と生活』29～41頁参照。

(25) 暉峻義等『日満露三民族の生活比較』34頁参照。

(26) 暉峻義等『日満露三民族の生活比較』37～43頁参照。

(27) 暉峻義等『日満露三民族の生活比較』38～40頁参照。

6. 研究成果

満鉄開拓科学研究所は、それまでの満洲開拓政策が抱えてきた開拓民の生活に関する諸問題に対して、先住民族の衣食住に関する実態調査を行い、優れた生活様式を科学的に明らかにすることによって、新たな指針を立てる活動を行っていた。しかし、研究所の成果は、開拓民の生活の実践に取り入れられることを見ずに、3年で閉鎖された。

3年間にわたる調査研究の成果は、出版活動（機関雑誌『開拓科学』の隔月発行及びリーフレットの印刷・配布）と展覧会開催で公にされた。「開拓科学展覧会」と称した展覧会は、1941年10月に「満洲国」の首都新京と奉天、次いで11月に東京で開催された。新京と奉天の来館者は明らかではないが、東京の満鉄支社で行った展覧会に招請したのが、開拓政策関係者・婦人団体・医学関係者・医科大学学生であった⁽²⁸⁾ことから、展覧会は一般民衆の啓蒙・教化を目的として開催されたものではなかったと判断される。

研究成果を日本人開拓村において応用・実践する事業は、後身として設立された満洲開拓科学研究所に委ねられることとなった。満鉄開拓科学研究所は、1941年7月下旬から、情勢の悪化に伴って研究の続行が困難となり、8月下旬に全所員が引き上げた。事務所を東京世田谷の労働科学研究所内に移して、ここで横道河子での研究成果のまとめと展覧会の準備を行った。満洲開拓科学研究所は、満鉄開拓科学研究所閉鎖から約1年後の1942年9月から、吉林省舒蘭県小城で事業を開始した。

満鉄開拓科学研究所から満洲開拓科学研究所に業務が引き継がれたことに伴って、事業内容等にも変化がみられる。

ひとつは、満鉄出資の民間事業から、「満洲国」の開拓政策を主管する開拓総局の委託事業となったことである。また、暉峻はここでも所長を務めたが、住居に関する研究を担当していた黒川一夫が臨時派遣所員として残った以外、満鉄開拓科学研究所の所員全員が引き上げている。

最初に満洲開拓科学研究所が着手したのは、集団検診による結核対策や寄生虫病予防であった⁽²⁹⁾。このほか、実際に行われたか否かは判断しかねるが、調査研究段階に止まった満鉄開拓科学研究所の成果を実践するため、「開拓農村に於ける簡素にして質実剛健なる生活習俗の確立、健全なる農村文化の建設を促進するを目的」⁽³⁰⁾とし、以下の実施案⁽³¹⁾を立てた。

- (1) 開拓団全団員の健康を確立するための基礎工作の実施。健康診断、体力・精神検査の実施。各家庭の健康簿を作成し、健康管理を行う。
- (2) 児童寄宿舎の建設。黒川一夫が設計並びに建築の現場指導にあたった。寄宿舎では、児童

(28) 暉峻義等「満鉄開拓科学研究所概要」64頁参照。

(29) 鈴木慎次郎「開拓科学研究所」『暉峻義等博士と労働科学』158頁参照。

(30) 暉峻義等『日満露三民族の生活比較』85頁。

(31) 暉峻義等『日満露三民族の生活比較』85～86頁参照。

の一般生活の訓練，集団生活の訓練等を行う。児童の生活訓練については、「真に皇国民として開拓の大業を世々代々に涉って完遂し，発展せしめることのできる有能良質の人を倍育し続けねばならない。これ満洲開拓事業の根幹である」という記述もみられる。

- (3) 青年男女の生活教育・生産技術の教育実施の具体的方針を確立することを目的とした「(開拓)青年男女塾」の設立。

以上の3項目からは，満洲開拓科学研究所の任務が戦時下における開拓集落の生産性の向上と社会教育に移っていったことが分かる。

満鉄開拓科学研究所の研究成果は，以上のほかに，「満洲国」の博物館という意外な事業で参考にされている。

「満洲国」国立中央博物館⁽³²⁾の新京本館に，「満洲国」内に先住する諸民族の家屋を建設し，そこで彼らの生活を展示する民俗展示場が構想された。ロシア人の丸太小屋，漢族や朝鮮人・日本人の伝統的家屋，その他モンゴル族やオロチョン族・ヘジェ族等の少数民族の住居についても建設を計画していた⁽³³⁾。実際，「満洲国」崩壊までに作られたのは漢族の家屋のみであった。漢族の家屋は1940年8月に起工して翌年9月に完成している⁽³⁴⁾。

「北満の農家」と命名された漢族の家屋は，1939年9月24日から27日に，国立中央博物館副館長の藤山一雄が調査を行った濱江省阿城県福昌屯の張百泉氏の大規模邸宅を模造したものである⁽³⁵⁾。では，なぜ藤山は漢族の代表的邸宅として張家を選定したのであろうか。そこには，藤山一雄と暉峻義等の意外な関係があった。

「北満の農家」建設において藤山と暉峻の関連を示す史料として，まず藤山の著述を引用する。

最も力を注ぐ北満農家の参考とすべき典型的なものが労働科学研究所長暉峻博士の推奨によるものが，ハルビン近郊，東天理村附近の福昌号屯にあるとのことで，九月廿四日から二十七日に涉り，同博士東道のもとに満拓，文化協会等の有志とともにその家を訪ひ，各自色々の観点から仔細に視察するを得た⁽³⁶⁾。

1939年以降，民俗展示場建設が行なわれていた期間の『国立中央博物館時報』中，暉峻の名前が発見できるのは上記の藤山の論述部分等の僅かな記載に限られており，『国立中央博物館時報』を読む限りでは満鉄開拓科学研究所との関連性は分からない。ただ，満鉄開拓科学研究所で活動した暉峻の著述には，以下のようにある。

(32) 1939年1月1日官制施行。新京のほかに，奉天に分館をもつ博物館。

(33) 藤山一雄「ある北満の農家」『国立中央博物館時報』第2号，1939，16頁参照。

(34) 副館長藤山一雄の民俗展示場構想については，大出尚子『『満洲国』国立中央博物館と『満洲国』の建国理念——副館長藤山一雄の『民族協和』構想——』『社会文化史学』46，2004，53～57頁を参照のこと。

(35) 藤山一雄「満洲国立中央博物館態制」『博物館研究』17-4，1944，3頁参照。

(36) 藤山一雄「ある北満の農家」16頁。

《新京に模造せられし張氏の家》

私は昭和 15 年に黒川所員をこの張氏の家に派遣して、其の建築を精査せしめたのであるが、或る時私は新京に於て満洲国立中央博物館長藤山一雄氏に会ふた時に、此の張氏の家の素晴らしい建築と、住みこなし方に就いて、私の感想を語ったのであるが、藤山氏は此の提案に従って、私と同道して、張氏の家を訪ね、その家を見るに及んで全く驚嘆したのである。このことが縁になって、張氏の家は、新京に其のまゝの形で模造せられることになり、昭和 16 年にはすっかりその模造の家が出来上って、新京の市外に其の勇姿を現すことになったのである⁽³⁷⁾。

以上の著述から、藤山の民俗展示場構想の源泉が暉峻にあったことが明らかとなろう。すなわち暉峻義等が 1938 年に北満地方を旅した時に張氏の家を訪れ、改めて暉峻と満鉄開拓科学研究所所員が張家の構造調査を行ったのちに藤山に紹介したという経緯があったのである。

では、暉峻と満鉄開拓科学研究所は、藤山の言うとおりに、単にモデルとする家屋の選定に関わっていただけなのだろうか、あるいは建設に向けた調査を満鉄開拓科学研究所が請け負っていたのであろうか、藤山が一方向的に満鉄開拓科学研究所の調査成果を参考にしていたのであろうか。以上に関して、未だ十分には検討していない。ただ、藤山一雄『ロマノフカ村』6 頁「序」に、満鉄開拓科学研究所員への謝辞がみられることから、藤山のロマノフカ村に関する知識は満鉄開拓科学研究所の研究成果を受けたものであり、のちに建設を予定していたロシア人民家の家屋設計にも大きな影響を及ぼすことになったと考えられる。

おわりに

日本人開拓民の生活方法を確立するため、先住民族の生活形態および労働形態を調査し、日本人開拓民の生活形態・労働形態との比較研究を行った満鉄開拓科学研究所は、所長暉峻義等の指導下で成果をあげた。そして、労働科学研究所が産報に統合された後に新設された満洲開拓科学研究所の活動とは、前身の成果を継承しながら戦争のための事業を遂行するためのものであったといえる。

満鉄開拓科学研究所の活動ないし暉峻義等と、「満洲国」の博物館事業を企画・運営していた藤山一雄とが結びついていたことは興味深く、さらに検討を進めることで、新たな「満洲国」像を提示することができると思う。

(OIDE Shoko 筑波大学人文社会科学研究所在学)

(37) 暉峻義等『満人の営農と生活』42 頁。